ヨゼフ会便り

発行者　ヨゼフ会　横浜市中区山手町 44 番地 カトリック山手教会内
第 49 号　　2023 年 9 月 30 日発行

¶「そなえよつねに」

磯子教会　協力司祭
内藤 聡

今回、ヨゼフ会便りを依頼されました内藤聡です。山手教会の広報誌「やまて」にも寄稿しましたが、改めてこちらでも挨拶をさせていただきたいと思います。

４月から磯子教会の協力司祭に任命されましたが、山手教会に住んでいます。メインは磯子教会ですが、山手教会でもミサ等その他の奉仕も色々としています。これからも、どうぞよろしくお願い致します。

私は現在、横浜教区のカトリックスカウトの担当司祭としても任命されていて、その指導等もしています。

私自身が、小学生の頃からボーイスカウトをやっていたのでその経験であるとか、スカウトたちと同じ目線で伝えることが出来ればと思っています。

山手教会にはボーイスカウト横浜３４団、ガールスカウト横浜８５団がありますが、私は８月にボーイスカウトのキャンプに参加させていただき、野外ミサなどをしてスカウトたちと共に過ごしました。キャンプの詳しい出来事は「やまて」などに書かれると思うので、読んでいたければと思います。

ボーイスカウトのモットー(標語)で「そなえよつねに」というのがあります。

「いついかなるときも準備しておくこと、何か起こった場合でも善処できるようにしておくこと。スカウトは何事に対してもいつでも必ずやり通すという準備を常にしておく。スカウトはいつも心にも体にも、技にもすきのないよう、どんなことにでも応じることができる心構えをもつこと」という意味です。

ボーイスカウトの記章

このことは、決してボーイスカウトだけに使われる言葉ではなく、日々日常を生きている私たちも意識していかなければいけないと思います。

聖書の中には「そなえよつねに」に似た言葉として「目を覚ましていなさい。その日その時が、あなたがたには分からないからである」（マタイ２５章13 節）があります。

ここの箇所はイエス様が弟子たちに話された、たとえ話ですが、２４章から続いている話です。２４章には、世の終わりの時、終末がいつ来るか、あるいはその時、どういう状況、どういう事が起こるかを、イエス様が話された記事があります。すべてのものは始まりがあれば、必ず終わる時が来ます。例外はありません。私たちの住んでいる地球にしても、宇宙にしても、始まりがあったわけですから、当然終わる時がきます。それがいつであるかは分かりません。しかし最近よく言われるように、地球の温暖化であるとか、いろいろな問題が山積して、いよいよ世の終わりではないか、終末ではないか、などと言われる時代でもあります。恐らくそう遠くない将来のこととは思いますが、いつそういうことが起こ

るのか、それは分かりません。終末の時にはどういうことがあるか、一つには天も地も燃え溶けて消え去ってしまうと、記されています。同時に、その時になると、主イエス・キリストが天から私たちのために再びこの世に下ってくださる。そのことを「再臨」と言います。「臨」（りん）とは「のぞむ」という意味で、来られることです。「再び」と言うのですから、初めはいつであったか、それはクリスマスの出来事を通して、イエス様が初めてこの世に来てくださった時です。神が人となって、この世に来られたことです。その後、イエス様は死と復活によって、弟子たちに現われ、昇天を持って地上での生涯を離れていきました。

私たちはそのキリストがまた来られることを待ち望むために信仰生活を送っています。

この「目を覚ましていなさい」というのは、どんな時にでも、ここから主の許（もと）に帰るのだと、絶えず備えをしていくことです。といって「持ち物を全部処分しなさい」とかではありません。ただ「目を覚まして」、心をしっかりと、今日一日を神様の御心に従って生きることに全力を懸けていくことです。

私たちの人生はあっという間に過ぎていくものです。その中で私たちはどのように最後まで生きていくかを考えていくことは大事です。いつ私たちが、この世を去り、死を迎えるかも分かりませんが、私たちは自分のためだけでなくキリストのために、神様のために捧げていけるように、日々準備しながら過ごしていくことが出来ればと思います。

皆さんもそのことに少しでも心を留めてもらえれば幸いです。

¶スモールクワイアをお迎えして

2023・6・4

岡崎 芳浩

「イエスのカリタス修道女会」は１９３７年に宮崎県で創立された女子修道会です。現在１６以上の国で約９００人の会員が医療・福祉を中心に宣教活動を行なっています。スモールクワイアはその活動の一環として約２０名のシスターによって構成される聖歌隊の名称です。東北の被災地にも何度も慰問公演に行かれており、私は１０年程前にその存在を知りいつか山手教会にお招きしたいと思っておりましたが今回それが実現できて本当に嬉しく感謝しております。

シスターの聖歌隊というと何か崇高で難解な宗教曲をイメージするかも知れませんが、スモールクワイアは親しみやすいメロディーとわかりやすい日本語の祈りの歌が中心です。そしてシスターの中に何人かの“シンガーソングライター”もいます。今日世界各地で続いている戦争、とりわけウクライナの子どもたちに多くの犠牲者が出ていることにシスターたちは大変心を痛めており、その思いから今回のコンサートは「いのちと平和」をテーマにしたメッセージ性の強いものでした。ここでは当日のセットリストと印象的なフレーズを書き添えます。

①「神様といつも一緒」　作詞・作曲　末吉良次

②「アベ・マリス・ステラ」　詞：ラテン語聖母賛歌　曲：やま

‘めでたし海の星’の意味。‘私たちを平和のうちにお守りください’ステラマリスも同じ語源。

③「聖ヨゼフ賛歌」　作詞・作曲　新垣壬敏

「マラナタ」を作られた新垣壬敏氏の作品。‘神の子を守り育てた聖ヨゼフ、神の民をもお守りください’

④「あなたの平和の」詞：聖フランシスコの平和の祈り　曲：Sebastian Temple

‘あなたの平和の道具にして下さい’と歌われました。「平和の道具」の部分を「平和の器」と歌うバージョンもあります。

⑤「La vera gioia」（喜びは平和のうちに）詞曲 Maro Frisina 日本語訳詞　門間直輝

苦しみのさなかに人々が希望をもって歩むことができるように願い歌われました。

⑥「私をお使いください」　詞：マザーテレサの

祈り　曲：上村幸一郎
マザーテレサの言葉をもとにした今回のコンサートのタイトル曲。‘主よ、苦しんでいる人や弱い立場にある人のために、私の手足、言葉と心をどうかお使いください’と歌われる スモールクワイアの代表曲。
⑦「Nella Fantasia」 詞：Chiara Ferrau　曲：Ennio Morricone
映画「ミッション」の挿入歌。唯一シスター峯(指揮MC)がソロで歌唱。
⑧「土の器」　作詞・作曲　田中瑠美子
この曲もスモールクワイアの代表曲。キャンドルを手に歌われました。自らをひびの入った土の器に例え、‘こんな私でも主は愛してくださる。だからその愛に応えるために私を用いてください’
⑨「祝福の歌」　作詞・作曲　Sr.谷口暢子
シスター谷口の作品。神に平和と祝福を願う曲。‘この大地であなたの道がすべての国で その救いが そこに生きる人々に知られるように’
⑩「アーメンハレルヤ」　作詞・作曲　末吉良次
⑪「いのち」　作詞・作曲　Sr.古木涼子
シスター古木の作品。‘神様がくれたこのいのちをみんなで守りたい。かけがえのないあなたのいのちだから’解釈の範囲は人それぞれで東日本大震災やいじめ虐待など。今回はウクライナの子どもたちを思い歌われたと思います。
⑫「Our Common Home」（ともに暮らす家をつくろう）作詞・作曲　Sr.前田智晶
シスター前田がロシアのウクライナ侵攻後に書き上げた作品。‘争いの絶えないこの世界に主よ救いを与えて下さい。傷付いた心に寄り添いながらともに歩いて行こう’
⑬アンコール「私をお使いください」
教会学校の子どもたちもステージに立ってこの曲をもう一度一緒に歌いました。子どもらしさを演出するならば定番の「アーメン・ハレルヤ」をアンコールに持ってくる選択肢もありましたが、あえて「私をお使いください」をアンコールに選んだのはこの歌の歌詞を子どもたちが大人になっても忘れないでいてほしいという願いからです。

今回のコンサートで歌われた曲中、「私をお使いください」「土の器」「あなたの平和の」の３曲は、困っている人や苦しんでいる人たちを助けるため、そして世界の平和のためにどうか私を役立ててくださいと神に祈る共通のコンセプトの曲です。スモールクワイアの求める信仰のエッセンスはここに集約されているのではないでしょうか。マザーテレサの祈りの言葉を実践し、日々活動されているシスター方には心から敬意を表します。

またお会いできる日が来ることを楽しみに祈り待ちたいと思っております。皆様もどうぞお祈りください。
※ここに紹介した曲は YouTube で視聴することができます。「スモールクワイア」または曲名で検索してください。

当日は１５名のスモールクワイアのシスターが
山手教会に来てくれました。

コンサートも終わり一息つくシスターたちです。

¶スワガー氏の事績

海老名 潤

私はカトリック山手教会の聖堂を設計したＪ.Ｊ.スワガー氏を尊敬する一人です。同氏の生涯に関しては「やまて」の６０１号(2019年11月10日発行）でご紹介しました。更に今年７月９日に聖堂修繕工事完了を記念する講演会の手助け通じて、広く信徒の方々のみならず、近隣の方々にも同氏の事績をご紹介出来て喜んでいます。さて今回、ヨゼフ会便りにもスワガー氏を改めて紹介する機を得ましたので､同氏が設計した建物の内、ノートルダム修道院と神戸モスクをご紹介します。

ノートルダム修道院（福島）は１９３２年(昭和７年)、カナダのコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会が福島市に５人の修道女を派遣したことから始まります。建物はＪ.Ｊ.スワガーさんが設計し、施工は山手教会と同じ横浜市の関工務店でした。建物の完成は１９３５年(昭和１０年)５月で爾来７６年に亘り仙台市民に親しまれていました。戦前にはヘレン・ケラー女史が１９３７年に初めて来日した時、この修道院を訪問し、昼食を頂いてから飯坂温泉に向かったとの事です。更に、太平洋戦争初期にドイツ海軍が拿捕した英国の客船ナンチン号の乗客１４０人（民間の外国人）の抑留所としても使用され、戦後は戦災孤児の収容施設としても利用される等､何時も慈善事業の中心となっていました｡但し、新しい修道院ができてからは地域住民の活動拠点或いは信者の礼拝などに使用されていたとの事です。

しかし２０１１年３月１１日の東日本大震災により相当程度の被害を受けました。修道院は建物を解体する方針を決め解体工事の日取りまで決めていましたが、これに対し日本建築学会、日本建築家協会（ＪＩＡ)の多くの建築専門家は強く異を唱え､種々議論が起こったとのことです。文化庁からの東日本大震災文化財建造物復旧支援事業の業務を受託していた日本建築学会の調査チームは震災被害の状況を視察し、完成後７６年経ってなお凛とした、荘厳さが漂う聖堂は壁や天井がはがれ落ち、屋根材が崩れるなどの被害が見受けられるものの骨格は毅然としており、むしろ白漆喰の壁や、磨き込まれた板材、手の込んだ職人技に感嘆の声を漏らしたとの由です。

殆どの専門家は解体に反対し、修道院側も大変困惑した様ですが、最終的には新しい修道院が残っていることと、これだけ東北全体が痛めつけられた中で、この建物のためにお金を使うよりも、その分、多くの被災者の方々に支援が届くことの方が大切。修道会も､『修道院のためにお金は使えない。今後は子どもたちの教育のために予算を使おう』との決意は固く､築７６年の修道院は解体されたとの事です。東日本大震災で、被災者に対して建物内に備蓄していた毛布や寝具などを提供したのが「最後の仕事」となったとのことです。感動的な話ではありませんか？私は天国のスワガーさんはこのような経緯をきっと優しく見守っていた筈と想像しています。

ノートルダム修道院(福島)

続いて皆さんにご紹介したいのは神戸モスクです。スワガーさんは宗教施設ではキリスト教関連が専門と認識していた小生にとり、イスラーム教寺院も設計していると知り吃驚しました。神戸では第一次世界大戦後イスラーム教徒の移住が増加し、モスク建設計画が段々と具体化し、特にインド商人達が資金集めの中心となり、これにタタール人、トルコ人、エジプト人、シリア人等も協力し建設資金総額１２万円弱の目途もつき､続いて１９３４年(昭和９年)

１１月１４日にモスク建設認可が下り、設計はスワガーさんが代表の「スワガー建築事務所」。施工は竹中工務店で決定し、鉄筋コンクリート造り、地上三階、地下一階のモスクが１９３５年（昭和１０年）に完成しました。このモスクは頑強な地下室と建築構造を持っており、１９４５年（昭和２０年）の神戸大空襲で焼失を免れ、更に１９９５年(平成７年)の阪神・淡路大震災でも倒壊せず避難民を収容し、現在に至っているとのことです。スワガーさんはさぞかし喜ばれていることでしょう。

神戸モスク

最後に今年８月１９日の朝日の朝刊（横浜版）に「伊勢佐木町不二家８６歳の建物いざさらば」と題してスワガーさんを日本に誘い、一緒に仕事をしたこともあるレイモンドさんが設計したビルの話が掲載されています。皆さん是非お読みください。

¶ ICCの７年間

Pierre SEVAISTRE

ヨセフ会の皆様こんにちは。スベストル・ピエールです。７３年前にフランスで生まれて、４４年ほど前２７歳の時に、仕事の関係で日本に来た者です。

２０１０年に定年退職の後に東京から横浜に引越しました。その時に初めて山手教会に来まして、司牧者はオスカル神父でした。３・１１の東日本大震災の後に、東京でパリ宣教会の下で集まっていたフランス語カトリック・コミュニティは大幅に縮小してしまいましたので、わたしは三年の間、東京の教会へ応援に出ていました。状況が少し落ち着いた２０１５年に山手教会に戻って設立されたばかりのICCに入りました。ICC(国際コミュニティー委員会)はローエッド神父の下で以前あった外国ギルドとフィリピンギルドを合併させた組織です。会長はアメリカ人でしたが数か月のうちに彼が辞めて、他の候補者がいなかったためにわたしが ICC 委員会長になりました。同時に教会委員会で ICC の代表として委員になりました。

最初の ICC の仕事は簡単ではありませんでした。言葉の壁が高くて日本語と英語の両コミュニティーの間には、ほとんどコミュニケーションがなかったのです。コミュニケーションをとれないと、どんな問題も大きくなります。例えば９：３０のミサの後の駐車場トラブルは大問題になっていました。わたしの最初の役割は、みんなに車を駐車場に残さないように説得することでした。

状況は少しずつ良くなりました、けれどもわたしは交通整理のために ICC 会長になったわけではありませんでした。任命された時にわたしの夢はどうすれば同じ聖堂を利用する日本語と英語のコミュニティーを一つの教会にすることでした。けして易しい課題ではありませんでした。二つのコミュニティーの間に大掃除とバザー以外にはほとんど接点がありませんでした。２０１０年のころに雙葉講堂であった共同クリスマスミサはもう別々になってしまっていました。

この状況をよく理解していたローエッド神父は他の教会へ移りまして、代わりにウガンダから来たロバート神父が英語コミュニティーの司牧者になりました。アフリカ大陸から初めての司牧でしたが、この状況を把握する前に、怪我をしてしまい、長く日本にいられませんでした。代わりに同じウガンダか

らキジト神父は司牧者になりました。やっと落ち着いたと思ったら聖堂の天井が落ちて教会ホールに移らないといけないことになりました。

この移動のために二つの影響がありました：①土曜日のミサは一週間おきから週次になりました、②第三日曜日ミサ後のコーヒーソーシャルが中止になりました。日本語コミュニティーと一緒になる機会は更に少なくなりました。これで問題は終わりませんでした。２０２０年３月には新型コロナウイルスのためにミサは全面的に中止になりました。信者たちはショックを受けました。大部分はしょうがないと思いましたが納得できない信徒もいました。おかげさまで、早い段階で山手教会は英語のミサ録画配信を始めました。もう一度ミサへ参加が可能になった時に、人数は４０人に限って集会を三交代のグループに分けました。毎週リマインダーのメールを送って枠をいっぱい使用しました。

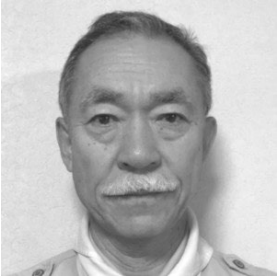
その時にダリル神父が司牧者になりました。聖堂に戻れた時に枠は７０人になって日曜日のミサを二交代に変えました。修理のためにも一度教会ホールに再移動した時に、ワクチンのお蔭でパンデミックが緩くなっていて、狭いのに人数を１００人にすることができました。それで今年の復活祭の時に、聖堂に戻るとほとんど同時に制限解除は可能になりました。本当にみんなのためにひとつの復活でした。

カテキズム(教会学校)は当分の間はオンラインで続きましたが、対面コーヒーソーシャルをすぐ５月に再開しました。これからポットラックパーティーとクリスマスキャロルを再開しようと思っています。この行事ができれば、もう一度日本人の兄弟姉妹に会う機会は増えることでしょう。残念ながら行事の再開とともに新たに幾つかの問題(駐車場など)が発生しました。できるだけ起こらないようにしますのでご了承をお願いします。問題だけ言われるとわたしたちがいて欲しくないという印象を受けますので、そういう風にならないように手伝ってください。大勢でわたしたちの行事に遊びに来てください。全員は無理ですが両コミュニティーの数人が、掛け橋になって、お互いに名前で呼べるようになったら、ひとつの教会になる第一歩だと考えます。

ダリル神父様と昨年山下公園にてピクニック

¶第13回全国カトリックスカウト・キャンポリー1年前下見に参加して

関 利定



ヨゼフ会会員の皆様、いつもスカウト活動にご理解とご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。この機会にスカウト活動についてさらにご理解を深めていただければ幸いです。

山手教会のボーイスカウト横浜第３４団はボーイスカウト日本連盟(SAJ)に加盟しており、SAJ は世界スカウト機構(通称 WOSM)という世界１７０カ国以上が参加している世界最大の青少年組織に加盟しています。

さらに３４団は日本カトリックスカウト協議会(JCCS)に加盟しており、JCCS は世界カトリックスカウト協議会(ICCS)に加盟しており、ICCS の本部はローマにあります。

世界スカウト機構で４年に一度行われているのが世界ジャンボリーで、今年の８月に韓国で開催され、猛暑と台風で避難したことが新聞、TV、NET で話題になりました。

また、同じく４年に一度日本国内で開催されるのが日本ジャンボリーです。最近では２０２２年に東京で行われましたが、コロナ禍の中で参加スカウト

も少なく盛り上がりませんでした。

キャンポリーとはジャンボリーより規模が小さい大会の呼称です。カトリックスカウトの全国大会では１０００人規模ですのでキャンポリーと呼んでいます。

全国カトリックスカウトキャンポリーはおよそ４年に一度開催します。１９９９年夏には第７回全国キャンポリーが山梨県道志村で開催され、その年に司教叙階され、スカウト担当司教に就任された梅村司教様も参加されました。その後、２００４年には第８回全国キャンポリーが大阪の能勢で、２００８年には第９回全国キャンポリーが岩手県の岩手山麓で、２０１２年には第１０回全国キャンポリーが富山県の立山で、２０１６年には第１１回全国キャンポリーが静岡県の御殿場で、２０２１年には第１２回が淡路島で行われる予定でしたが新型コロナ蔓延のためオンラインで行い、第１３回が２０２４年淡路島で行われます。

今回の下見に参加されたボーイスカウト、ガールスカウトの指導者は５６名で、東京、神奈川、静岡、愛知、石川、京都、大阪、兵庫から集まりました。３４団の指導者は５名が参加し、１名は勤務先の香川県からオートバイで、１名は大阪からレンタカーで、私を含む３名は新横浜から新幹線で新神戸に向かいました。新神戸ではチャーターした大型バスが待っていました。

開催場所である国立淡路青少年交流の家は淡路島の南西に位置し徳島県の鳴門まで車で４０分のところです。近くの吹上浜は綺麗な砂浜ですが離岸流が強く遊泳禁止でした。少し離れた阿万海岸は海水浴ができます。来年のキャンポリーには全国からおよそ８００人が参加予定です。小学校５年生までは施設の中に宿泊し、６年生以上は野外でキャンプをします。テントをどこに張るか、救護室をどこにするか、カッター体験ができる、海蛍も観察できる、夜は満天の星らしい、鳴門の渦潮も見に行ける、大塚美術館に行くこともできる、キャンプファイヤーの場所は、全員参加のミサはどこで行うの、皆で色々と話し合うのも楽しい一コマです。

淡路島は大阪大司教区ですので６月初旬に大阪大司教館に伺い、前田万葉枢機卿様と酒井補佐司教様にご挨拶に行ってきました。酒井補佐司教様は同じ日に黙想会があるため参加できませんが、前田枢機卿様は参加して梅村司教様とともにミサを司式してくださることになりました。お二人ともスカウト活動にご理解があり非常に協力的でした。

下見の二日目に私たち本部役員４名は淡路島にあるカトリック洲本教会のミサに参加しました。ミサ終了後、グイノ・ジェラール神父様より前にでて挨拶をしてくださいと言われ、４人が前に出て自己紹介をして、来年のキャンポリーには全国から８００人が集いミサを捧げるので、ジェラール神父様も信徒の皆さんもぜひご参加くださいと呼びかけました。

カトリック洲本教会

洲本教会ミサ後ジェラール神父様と私達役員

その後、聖母被昇天のパーティーで残ったかき氷を食べるのでどうぞと呼ばれご相伴にあずかりました。イエス・キリストによって集められた洲本教会の方々とわたしたちの心が通い合ったと感じられました。

帰り際、新神戸駅から徒歩１０分くらいの場所にある、元ユニオンチャーチの建物(聖堂も含む)がパン屋さんと喫茶店になっているフロインドリーブに寄ってお茶を飲んでから帰宅しました。

来年行われる第１３回全国カトリックスカウト・キャンポリーが恵み豊かに行われることができますように。

¶ヨゼフ会活動報告（７月～９月）

・７月９日（日）：講演会

聖堂修繕工事完成を記念し聖堂修繕委員会主催、ヨゼフ会/ロザリオ会共催で「建築家スワガーとカトリック山手教会聖堂」というテーマで黒田建築設計舎代表・黒田大吾氏、レイモンド設計事務所代表・三浦敏伸氏をお招きして講演会を開催いたしました。

・９月３０日(土)：ヨゼフ会便り第４９号発行

¶ヨゼフ会活動予定（１０月～１２月）

・１１月４日(土)：帰天者のための追悼ミサ

昨年１０月から今年９月までに帰天された方の追悼ミサをロザリオ会と共同で捧げます。
今年は従来通り人数制限は行わない予定です。

・１１月下旬：木曜パトロールの支援

毎年続けている「木曜パトロール」活動支援のため、下着類を購入し提供する予定です。

・１２月２３日(土)：ヨゼフ会便り第５０号発行予定

・１２月２４日(日)：降誕祭ミサ奉仕

ミサ会場など詳細は未定ですが、会場準備、案内、片付け等の奉仕を行う予定です。

※新たな活動・奉仕等がある際は、逐次お知らせいたします。

¶会員消息

次の方が帰天されました。永遠の安息をお祈りいたします。

帰天日	洗礼名	氏　名	享年
2023/07/06	ペトロ	浦岡大吾様	６７歳

¶編集後記

「あかね雲」つい数日前の夕方、少し風が吹いていた。ふと窓の外に視線を向けると遠くの西の空に、わずかながらあかね色に照り映える「あかね雲」を久しぶりにみることができた。「あかね雲」は夕陽の方が似つかわしい。世の中今年の長い猛暑の夏のあと秋分の日、中秋の名月をへて、やっと、もの寂しい短い秋を優しく迎えつつあるのかもしれない。

そしてなぜか篠田正浩監督の映画「あかね雲」を思い浮かべた。１９６７年公開、私は中学生ゆえ数年後に鑑賞。当時篠田正浩は松竹から独立、表現社を設立し第一回作品で当然力が入る。原作は水上勉、昭和１２年の設定で戦争がすべて。どんよりとした北陸能登の海を背景に、家族のために貧しく薄幸の中でも純粋に生きる女と逃亡中で脱走兵の男との悲劇的な末路を描いた映画である。ある日数少ない相談相手の女給に誘われ、件の男との出会いもあり山代温泉の働き口に行くことになる。女は山代に向かう列車の車窓から、日本海と燃えるような西の空に「あかね雲」をみるのだ。あかね色のみパートカラー。水上勉の小説は、五番町夕霧楼しかり薄幸な女性と劣等感を背負う男性の物語がいくつかある。

「あかね雲」は決して暗いイメージではない。この主人公だって少しでも今よりまともな生活をしたいと願い、希望を込めて「あかね雲」をみたのだ。

私が幼少の頃、育った赤羽岩渕で今よりも空気がきれいで高い建物が少なかった時代の夕方、帰りの遅い私を心配して自宅の前で待っているあかね色に染まった母の姿を何回もみている。そうだ今度「あかね雲」をみたら「健康でありますように」と祈りを捧げようと思う。祈りのうちに。（坪井暢）